



關卷驚奇俠客傳
編三

四

~ 13
3156
11



へ13
3156
11

虎の皮を裁き
有りては

開卷驚奇俠客傳第三集卷之四

東都 曲亭主人編次



第二十回 縫殿自焼く樓を飛ぶ

大形の吠るる群犬聲が相從く虚実の間を惑ひの世を言ふる習俗のあり。縫殿の既彼岸を報も知せし京師の凶変刺果の風聲の這那符節を合せどく疑へどもあはれ。這果も緝捕使と向られ。折衷潔く死者との。瞻望して。覚期よとも言ふ。さき。ゆ。ぞ。知。生。小。黄。縁。垣。衣。を。救。入。與。不。恁。々。と。諸。君。宝。珠。院。兵。鉞。妾。小。心。と。し。垣。衣。つ。ら。う。ら。听。て。寔。不。思。議。の。死。を。あ。と。御。辰。會。の。時。と。左。右。の。計。し。小。道。の。と。ふ。あ。ね。と。縫。刺。の。技。の。も。の。之。掛。け。る。身。を。然。る。を。み。て。了。す。あ。尼。御。前。さ。の。の。ら。る。稱。美。争。何。の。せ。と。解。と。縫。殿。の。听。の。全。時。

開卷驚奇俠客傳第三集卷之四

開卷驚奇俠客傳第三集卷之四

かろふ事あはゆる大賤の舊衣の鮮洗のまきまき。やちら儘の。とらちら推
薦ゆくり立のいそに納戸より合ふ。束の匣。昨夜消地。準備。とらちら正元
夫妻の木主菊水の旗金銀。も藏りし。備え措き。後方。居る。一箇の衣箱を
とらちら指示し。喃垣衣刀。祢。這内。の夏冬の衣袋。箇。欲。あ。感。身。ま。あ。
せん。小。幸。時。も。他。宿。み。歌。み。便。る。身。の。ま。涼。朝。暑。日。不。隨。意。合。お。被。受。
又。這。匣。要。の。東西。復。市。が。か。る。ま。共。御。寺。の。と。智。圓。禪。尼。も。信。と。
告。京。し。預。け。ま。る。み。お。臂。近。措。き。這。も。あ。然。氣。も。又。誂。情
只。有。敷。系。石。倉。の。媳。婦。と。後。の。事。逆。を。憑。む。苦。ら。け。限。の。復。あ。と。紀。念
贈。の。夏。涼。衣。も。包。み。隨。四。掛。て。色。お。ま。ま。と。名。あ。縫。殿。引。垣。衣。の。深。死
情。感。涙。拭。ひ。も。又。額。で。過。世。甚。麼。る。罪。障。也。幸。免。え。幸。免。て。流。離。し。ら
今。や。ふ。も。夏。の。草。枕。這。里。旅。宿。の。ま。け。は。又。別。添。も。又。奴。家。と。ら。ち。ら

宣。い。御。寺。入。寓。の。あ。ま。ゆ。り。か。る。御。恩。ま。ま。衣。の。賜。へ。と。受。も。功。へ。る。そ
美。免。の。と。推。辞。と。听。金。頭。と。掉。き。そ。ま。口。誂。は。這。衣。箱。の。内。も。我
少。り。時。被。舊。と。今。の。要。る。東西。の。あ。身。の。素。生。の。流。寓。の。情。由。向。い。ま
か。で。の。具。も。知。ら。ぬ。と。絶。て。久。復。市。の。伴。れ。來。る。人。も。ま。信。と。隔
も。あ。る。駝。遣。と。い。て。あ。ま。と。ま。垣。衣。の。ゆ。び。固。辭。難。と。致。し。を
舒。も。縫。殿。然。と。と。點。頭。て。寫。措。と。る。書。一。通。と。住。持。并。同。宿。の。比。丘。尼。達
へ。袋。包。被。布。施。の。阿。弥。陀。の。御。の。糸。掛。て。願。ひ。と。白。楮。線。は。昆。布。尉。火。半。漆。で。折。し。折
敷。と。俱。推。裏。む。單。袂。兒。の。偶。會。と。折。返。と。も。餘。り。あ。る。屋。敷。夜。の。物。櫛。与。鏡
臺。這。那。婢。妾。毎。や。も。修。り。皆。端。近。く。お。と。却。農。僕。一。兩。名。と。喚。と。使。と。
詞。急。迫。し。吩。咐。て。身。衣。せ。垣。衣。の。卒。と。會。釋。を。先。又。改。告。別。盡。の。日
兼。は。露。る。脆。に。涙。を。拭。身。人。の。情。と。形。を。身。の。不。樂。し。と。立。難。垣。衣。の。縫

鬼貫の鐘
農僕門の格駝の抗る衣箱小包大裏背に載せり引提も去る方左と聲を
持る如意宝珠女僧院投ていそける按寄不俳諧師危實が難雀の發句ある作得て
つゝ佳其句ありて人の親は鳥追ひけり雀の子夫俳諧の巴人の短曲宛ふ十有七言
れどもその情と穿らとかの如く至れるもあはれ縫殿が必死の覚期今垣衣と申
遣るあはれ似る人の親は鴨と追ふ類も一問話休題悠而這日の黄昏時候
垣衣を送る農僕們かかち來り縫殿が身邊に赴きて宝珠院の障りもあはれ歡
びて那女中留められぬとぞ那果の口状緯の容子と箇様々と報知し住持の回
翰と速與ふれぬ縫殿の受とぞ見えて心安と云まゝ甲夜の回ぬ農僕を
送り奥の召聚て潛中示さる汝達信も多かる秋今番姫上京師を悠るの

殿の胸に鍼刺さ心地へ泣くはれは生憎の悲しき瀕するも目送る程か
農僕門の格駝の抗る衣箱小包大裏背に載せり引提も去る方左と聲を
持る如意宝珠女僧院投ていそける按寄不俳諧師危實が難雀の發句ある作得て
つゝ佳其句ありて人の親は鳥追ひけり雀の子夫俳諧の巴人の短曲宛ふ十有七言
れどもその情と穿らとかの如く至れるもあはれ縫殿が必死の覚期今垣衣と申
遣るあはれ似る人の親は鴨と追ふ類も一問話休題悠而這日の黄昏時候
垣衣を送る農僕們かかち來り縫殿が身邊に赴きて宝珠院の障りもあはれ歡
びて那女中留められぬとぞ那果の口状緯の容子と箇様々と報知し住持の回
翰と速與ふれぬ縫殿の受とぞ見えて心安と云まゝ甲夜の回ぬ農僕を
送り奥の召聚て潛中示さる汝達信も多かる秋今番姫上京師を悠るの

伏見傳書第二冊卷四

三

...

殿の听か我身の獨せん術あり其頭のさる撰念を徐に準備し備えんと然も
謀がま言示さるる大家その意は従の心よりさるる此年来仕れる恩と
期先を逃もはせ困らる明の朝より部として外はさるの割篋を推入遣
各々身の覚期東西失は下と袂小包む秘事姫松葉密々採入れて受破との
焼立も先のをさるる自焼の準備做果て候小客等心地と二日々と過
たる不樂し限のるるの介程は楠式部少輔正直の居るの士卒共侶は姑麻姫王
僕と伴て京師と出てひるるの一日二日とゆる里飾錦の花散る丹楓未し新樹
傲も高峯過む杜鵑聲喚たり河内路もさるる珍らしを四八る八九村の莊
院近くる隨は駒の足搔も早めけの候の一回は彼岸二日この途は立出てさる
素はぐと現れ認めれぬ居るの士卒は是姑麻姫が正直を送りてかゝる事
必もかた胸うち駭て他へ正可の京師より我方さるる向らる緝捕の大將士卒と

あは頻る駭怕れて飛が似く八九の宿所へ走還らる息吻あは御注進とと叫ぶ
駭く奴婢農僕們絆をあれと立謀を縫殿の奥も喚禁めて出て容子と鞠糸けり
登時彼岸二額より流る汗を推抗拭ひて膝突立聲慌くさる都路より推寄
来る緝捕の大將騎馬苛めり四下と拂ふ那隊の士卒二三百名その猛と峯より降
去虎の羊と趕ふと速死と野の揚る雁鳥の雀と机糸似て當るもいざ今いざ
相距ると五六町と過る豫用意のけの為其頭の餘人の任用と快々昔門より
落る卒を伴と仕らんやと快々と聲叫酒を氣と同殿肉をさるるさるる
縫殿の謀を衆人を那這とさるるこの期は迫りて絆を説き眠るあは
我身の東面する矮樓を登りて遠見とせ緝捕の士卒近づる上より聲を被るその
折不快火を放ち煙を紛れて後門より走るとも遠達をさるるさるる納戸の退
は身装と短刀を引提て矮樓へ登ると齊一直上は奴婢農僕は彼岸二を招き



女有像第五輯卷四

五

女有像第五輯卷四



女有像第五輯卷四

女有像第五輯卷四

女有像第五輯卷四
女有像第五輯卷四
女有像第五輯卷四
女有像第五輯卷四

せて和正可乎と來る緝捕の大勢近着らん。烽火の暗跡と噂漏る。期は後
れ捕れん快く復る。と云ふ彼岸二ある。門をたてて。依りて。引え。聲
きて。衆位立近つら。緝捕使の先隊の。ある。做る。と逃去。と頻る。端
速の催促。大家傳。悸難。で。原來。免れ。処。烽火の暗跡と噂漏る。期は後
後る。と左右。あつる。諸慌。あつ。準備の。烽火。と投る。あり。先。の。逃。往。方。を
あつ。雲。紛。ふ。煙。の。天。引。て。あ。起。升。る。猛。火。の。勢。ひ。風。の。靡。び。て。煽。々。たり。急。折。か。り。正
直。八。九。の。宿。所。近。つ。隨。心。も。る。件。の。煙。を。ち。仰。せ。膽。ち。散。馬。で。て。兵。每。他。も。ま。知
る。那。莊。院。は。失。火。あり。走。る。取。次。で。快。く。滅。れ。我。は。續。け。と。鐘。を。拍。と。草。奪。地。中。を。走。り
る。馬。を。引。添。ふ。先。隊。の。雜。兵。非。常。の。與。推。へ。る。鉄。又。捍。棒。と。扱。と。逸。足。斐。と。
猛。く。勇。の。勢。ひ。千。軍。萬。馬。の中。之。も。摧。入。る。を。為。体。と。縫。殿。の。遙。々。と。現。現
る。緝。捕。の。兵。猶。豫。せ。ず。這。里。も。綱。入。る。是。を。短。刀。を。引。抜。せ。る。直。と。念。佛

高く十遍許唱へも果は刃犬と咽喉へ馬熟と大串で廂も移る猛火の中身も跳ら
きて飛入りけり。嗚呼憐む一義烈の勇婦一旦縛の錯誤を死と功ある禍鬼は
は恨もさるるの琴の良人も御京京師を迷ひ同ト死天の旅地方替れ品降る
鄙中も猛は剣刀身も捨一妻と束の間は栄枯得失幸不幸真愛苦歡樂主後の
這世那土へ別路を遇ぬ難を知らるより。ある。姑。麻。姫。を。八。九。の。宿。所。に。失。火。あり。と。云。い
より。ち。驚。馬。を。復。市。と。作。先。走。り。路。の。傍。に。轎。子。を。歌。を。隨。時。程。を。ま。り。
火の鎮る。望。す。け。り。傍。り。一。程。は。正。直。の。馬。を。拍。れ。八。九。莊。院。の。門。前。に。騎。着。て
只。管。下。知。る。雜。兵。を。繰。入。る。火。之。滅。ま。れ。近。に。里。を。莊。客。們。も。皆。那。這。ち。走
る。水。を。汲。か。り。柱。を。倒。し。諸。骨。折。々。掙。れ。幸。ひ。と。山。風。の。烈。い。も。あ。り。一。六
東。の。火。を。焼。失。て。そ。の。它。へ。過。洋。残。り。け。り。既。に。と。縛。鎮。る。程。は。正。直。を。復。市。と。兩
個の雜兵を遣と。姑麻姫并はる。身は宅眷。口は聚合。任々と。縛の。と。報。知

去る姑麻姫の縫殿が往方とも誰も知らぬ東に焼跡の煤が
 屍骸あり短刀を抜持する母も放さぬと告ぐものばあはれ敬馬疑ふ姑麻
 姫も復市の母の心かれば小童時あはれ走ると其首を封じて件の屍骸とす
 まも焼けて真黒まの疑ひ釋きけり正直れをり所て縫殿とすん左
 右まれ一家見る奴婢毎の今まで一人あつて来るありあつたるか快楽の
 と急下知し道不難兵と俱復市を作們的走り出那這部とつ涉獵
 程五六町西の山路を仰及付まのあり他を多くをそを彼岸二
 去と喚つけられて彼岸二頭と拾げゆえに他和主の京師より何の程あり還り
 な。自家の緝捕と脱れんと家火を放後門より入小後れ逃れ命運多し這
 頭也他那石を踏んで轉輾び折腰骨と下隆に撲差し立不起れ疲楚堪ぬ
 鈍や今まで臥くもやよ引起し復市と雜兵四五名来りければ他は

復市們の彼岸二指し示し他我方の奴隷を彼岸二と喚做すの箇様
 箇様のゆゑに憶せ石を踏んで這頭小在りしと詞せり報知られ大家俱
 訝りてその所以ありん極心何もの與京師より緝捕使の向ふとわんや況や家火を
 放て逃したる罪輕く捕ま追しを牽りて捕殿正直京上快く喜ぶと暴
 ちあふ合ふ足と市抗て八九の宿所へ来て來り則緝の趣と正直報と正直馳
 ちちち端近く出るとと鞠ふ姑麻姫も驚き障子の陰自身喜悲と縁由と所す
 登時彼岸二からなる膝折布て緝使々と招き趣を京師と維盈管領の士
 卒の為小瘡を肩すて既小必死とを折自己の幸逃走と辛く河内からあはれ
 姫并小維盈の敷れんとと維盈の妻縫殿小折り京師の風聲の這頭
 ちちち必緝捕使と向えんと期及ばは達の家火を放て逃下と先燒草と準備

然却人別盤費賜不可都路又遊佐殿の城の文も人を遣してせられ。
 二三百の死勢の這方推寄東のひよ小可違えてければ是必京師より向合の緝捕使
 くる。身も走れぬ走のからせり。縫殿刀袷報ける然我身の格榎か登りて見定せ
 聲に被んぞ折火をのせよと。短刀引提て遠く。うち登りぬ程の御執は近
 つたが件の暗翳もあつても及ぶ大家慌て那這火を放ち共侶も走りて背門
 より逃折小可の山路も石の怪一蜚骨損して仆れ人をもひねと有る隨陳裏
 去顛末分明せられぬ。縫殿の既子枉死と片言られ正直の疑ひも解きし。側聞
 せ復市と願れらちぞ姑麻姫の數倍倍を思患悲原那もよ及持る亡懸
 縫殿もん我母をなと思ふの言もせぬ。詮議の果るも程正直呵々とも分大
 いてぞくまの縫殿とまが疑心暗鬼の迷はれる疎忽の自滅是非及ぶ。是女流の
 られ深くはる不足なぬ。一家見る奴婢母父を般費と受ふ暗翳を

火を放ち逃縫殿を焼殺し。その罪孰免る。就中彼岸不疎忽の姑麻姫を初
 り。綱轡子の無せられ。街衢と牽れぬ。又維盈より伴當の數れとふ。我の
 一切夢知。全我も。知ぬ。この這奴が知ん該る。と云云と縫殿は告て聞せし。那
 這人の名を虚と偽て喋る。緝捕使は。さあ。知ぬ。姑麻姫の。思救小よ
 正正直送りと返。來け。何里緝捕使を向ら。死意。這着物。執裡。魅れ
 ら。歌を。唱。徇。り。家。焼。て。縫殿を殺せ。その罪。も。輕。く。遊佐氏。の
 告知。て。逐。電。を。る。奴婢。們。も。素。中。と。後。ふ。と。那。首。の。沙。汰。及。ん。じ。綱。を。措。べ。
 と。雜。兵。們。も。預。け。ぬ。あ。至。り。彼。岸。二。初。て。夢。の。覺。ま。と。眼。を。睜。き。吐。き。て。つ。と。
 夢。解。く。よ。ま。れ。の。黃。壁。と。詠。り。啞。見。は。獨。苦。身。の。科。の。今。や。せ。方。歌。頭。小
 思。念。せ。ん。間。も。是。茶。の。幸。立。り。て。退。き。け。程。復。市。の。藤。と。我。を。恭。く。正
 直。稟。ま。す。方。才。彼。岸。二。招。了。也。那。燒。死。る。一。婦。人。の。縫。殿。も。疑。ひ。件。の。縫

殿の在下が母親... 許さるゝ願ふ... 身故の... 對面して... 後日の比... 〇〇遊佐の城... 復し兼して... 伴當と復市... 事倍々と報知... 〇〇それ... 智圓小贈る...

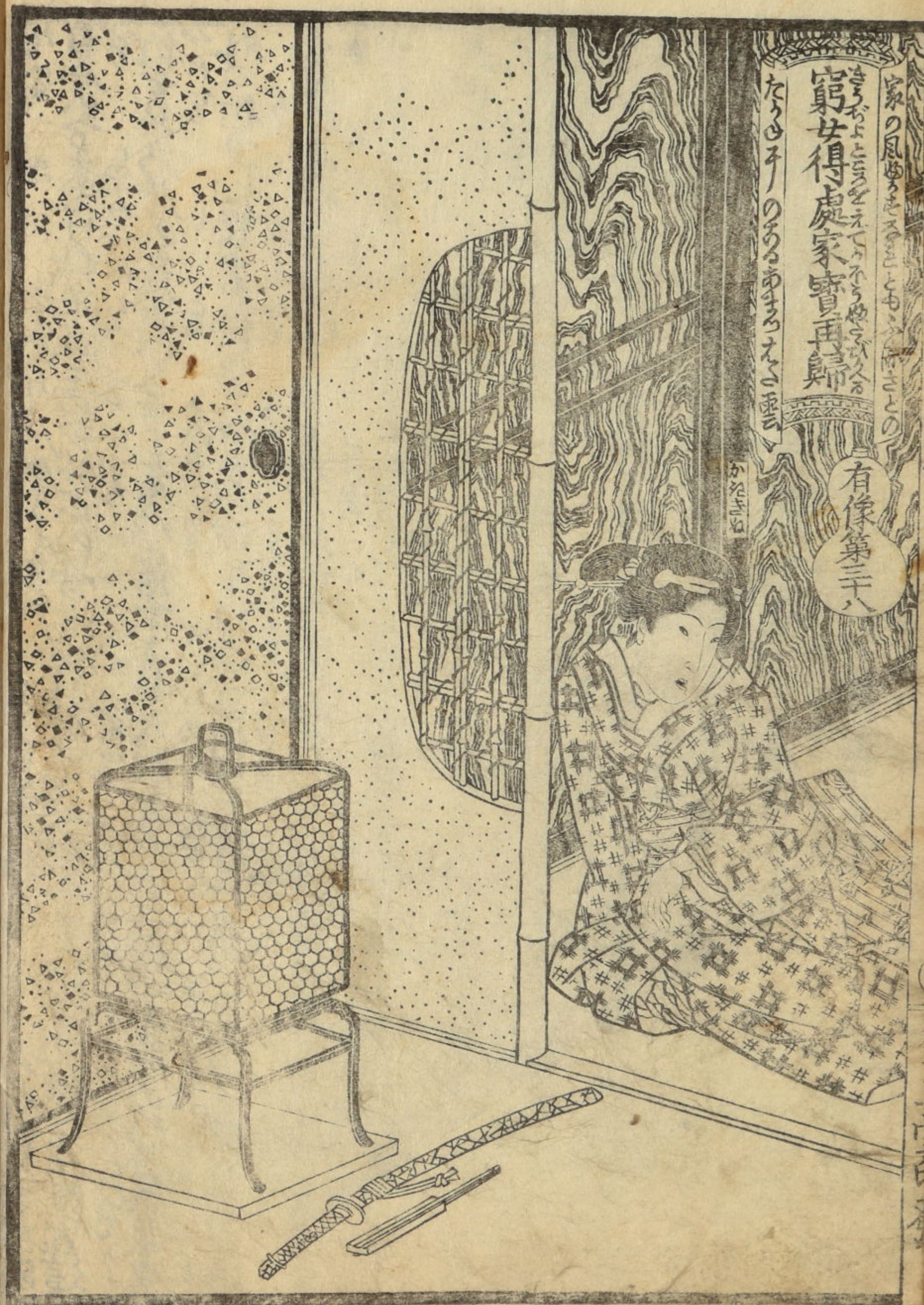
程の長は日... 其路を... 只一日... 〇〇今... たるらん... 然るも... 〇〇投... 〇〇空... 〇〇る... 〇〇九... 〇〇登...

第二十八回

山上の千里鏡 克莊院と願ふ
佛前の本命録初て病味を知依

かくていへりまはらひのたまひ
却説石倉復市の垣衣とおてその黄昏八九に莊院の末てまはらひの外より入るる
いと訝しく思ひつゝ 馳つて心を通近着て 這頭ののし鞠のふも作茶然りと正直まの遊
佐殿の城内の宿所わの權且其首住のつと 奥方并息女さへ召合さるゝのいひ亭午の
時候でいひに任せれば我姫上の萬支亦便るかべと先づ伴當両三名を留めて這里隸の
まゝらとふ復市點頭て又垣衣と伴やとそ終奥へ杖さる果と姑磨姫は身邊邊中
絶て人氣のさうらうと且垣衣と次の間へ留めて獨姑磨姫の身邊邊へ赴た額をさるて
るゝ画示上へ僕不慮不故御無遠て京より又伴仕りの則親の送訓のれり是切と
とまらる異表の京師と申すも今朝まの死側へ入る親のう我うさふは侍と申すも
折るるうさふを訝しく思食は昨日仰承る如く母縫殿が亡骸と宝珠院へ葬り

目今おの末おれは正直まの死老小の皆遊佐殿の城内へ迎合れらる初て美知は這
折るる乃者の意衷と盡しなるととまらとて大胆る身三親の忌服を異表慮
外の折れに喪の中替らる麻衣の涙の世と争何せん許さるるはさあて死疑ひを解
くを秋とて姑磨姫を所てと我望む野之叔父君の伴當の送されるも入秋とて
まはらと這里へ送る京師を維勢在るるもいと心ひらきとて那彼岸へ招了
とせせらる人よりいんも病聞より惜めらるる歎けらる悔めらる返さるる哀れ
差一人言の仇と做らる雄々しく怖と自殺せられ我復の故めて霜夜の炭を
臣節婦と喪ひて不幸のあなたも我身の為も一大不幸面目もさるる
豫知はあなたが来るべしと思ひひらきとて親の忠義を承も嗣も志誠心と精
由と詳く知れ靴を隔て癩と撥く心地のそと本意するの快々甚し其い
れて復市愀然る貌とみせ聲と密めて父維盛京師を命領員は満家の三三子の



為小深疾を肩より自殺の及ぶ首の尾又箇様々との折の送言を
報知する事平响許又小可の事なる故御方の来けり候情由を以て養家も御
緯の趣後の養母の携り子三郎の家と嗣せよ折の途を必死の大死
辛く免れ浪華の来り候に這時影と願ひ退身の折の途を以て一個の行伴あり
他の事とて捨る事忍び相俱へて遂に故御方の事絶て久に母親の再會の本意を
遂に父惟盛の姫上の高野詣御供の事とて還る事と折母の推量の姫
上皇城を亦肉を食て京に赴き候り思ひ候へば夜を夢と心あがりやれども京師
赴きて訪ひなれとされし行伴の女子も依八九の宿所留めり候に
たれ曉の夜宿の路次といひ言ひ候へども京師に到り候に上獄合不敷れぬ風
聲詳ふはえり候に驚き那這と獨伴相せり程に父惟盛が満家の主と係持娘身
捕縛され遠箭前射られて既小深疾を肩より折料其首を赴きて豫修煉煉と飛
上皇城を亦肉を食て京に赴き候り思ひ候へば夜を夢と心あがりやれども京師
赴きて訪ひなれとされし行伴の女子も依八九の宿所留めり候に
たれ曉の夜宿の路次といひ言ひ候へども京師に到り候に上獄合不敷れぬ風
聲詳ふはえり候に驚き那這と獨伴相せり程に父惟盛が満家の主と係持娘身
捕縛され遠箭前射られて既小深疾を肩より折料其首を赴きて豫修煉煉と飛

仇と矢庭の敵も退け既小付れ維盛を肩より引掛け走去りて日の圓の頭を觀音堂へ親
るよりの子より一よの送る名生りて會と別れ日暮追外降驟雨と油漣一行
涼きりか下と覚悟の父の思ひ旋を後事只姫上の御先途と看なれと町平小送
忠誠勇猛林を聞き奮激とてみづり刻ぬ死に枉死の満家の主の網轡子と秘計
の姫上の支黨あふ擲捕んと欲せりと知りも無甘れて皆皆馬餅とて後悔の
外に那彼岸に招き候網轡子のひひと正直主の知る候情由と知るの平る候に
満家の主の秘策ある後々も情由と知るの平る候に侍て當晚小可父維盛男亡骸
觀音堂の頭を瘞て又浴中へ赴き候に姫上敷れぬ日小極むと克く一人とて仇を殺
る。眞士の死伴去れと以て決りて候に那這の風聲耳と探つひひと敵と遇ひ候に
牌の寫されて伴當あふ正直主の第へ参り候と御示さる事分明を疑ふ候に
忽地意表小可親小付り候に他を以て正直主不見参る候に姫上歸御の死伴の立り候

介不御不僕。這里不留也置。女子の往方知れざれば自焼の折。婢妾們と俱也
 迷ひ出さるべしと推量多し。他に自も。宝珠院に在る。日料も對面して縁由を問ふ。
 いづれ日我母が徳々との誘。那里遣らる。折小可が。あまきと。目取重なる。一
 箇の匣の件。女子預け遣。這衣堂表調度。と。合せらる。事の情を猜さふ。
 母縫殿。只管彼岸。似而非注進。世の風聲。不惑されて。姫上も維盈も。京史較る。ぬを
 以。緝捕使向。自焼と死念。既覚期。折小可。行伴。女子。助けん。そ
 縛云。誘へ。那女僧院。豫より遣。疑ひ。件の女子。垣衣。喚做。の。と。
 故御の伊勢。某の里。由緒。武士の女兒。も。過世。小可。窮厄。俱。這地。
 伶仃。不。有。數系。揮。棄。折。宿所。婢妾。毎。二人。在。一。智圓
 禪尼。請。京。と。依。俱。と。先。那。匣。御。覽。入。後。方。と。宝珠
 院。より。と。來。る。匣。合。と。恭。く。姑。麻。姫。ま。あ。る。け。介。程。姑。麻。姫。听。と。母。不

後悔の額を病。嗟嘆。と。維盈。と。の。縫殿。と。の。或。敵。の。為。謀。られ。或。躬。方。行。は。れ。て
 命果敢る。なり。亡。せ。り。比。皆。是。我。身。の。越。度。也。師。の。誠。守。り。け。出。宗。と。知。れ。罪。ま。ら。り。
 男。倍。る。夫。婦。の。心。列。も。甲。斐。る。似。れ。も。仙。尼。の。遠。離。る。獨。子。復。市。料。
 故。御。か。る。親。の。忠。義。を。接。こ。是。花。謝。と。実。と。結。三。世。天。縁。最。憑。然。終。
 殿。送。た。る。匣。の。必要。あ。べ。何。あ。わ。ん。と。か。と。の。復。市。あ。る。て。を。も。匣。引。き。重。
 封。皮。せ。韓。組。切。鮮。返。又。返。と。開。け。内。正。元。夫。婦。の。木。主。并。菊。水。の。旗。這。它。を。金。
 銀。多。く。あ。る。只。一。枚。の。目。録。の。左。編。金。の。寫。寡。と。寫。木。主。の。祠。堂。納。成。旗。の。什。物。と。
 秘。措。の。短。と。短。と。送。筆。の。迹。勢。以。宛。決。然。男。優。女。文。字。の。子。は。為。中。一。行。
 今。般。の。忠。心。義。胆。深。く。感。主。従。の。憶。を。回。照。火。の。感。涙。の。外。な。り。す。日。始。
 麻。姫。の。木。主。と。旗。を。合。抗。額。不。駭。ら。念。と。匣。の。藏。の。臉。を。拭。て。喃。復。市。較。れ。け。り。
 と。思。れ。我。身。の。善。も。縫。殿。今。般。の。選。佛。場。秘。え。と。せ。一。家。の。重。宝。の。と。我

て 小還つら凶中の吉禍中の福火中も焼れ人の中も渡さる倚伏の糾ふ纏ふ似たり。定めぬ
 世の起住い神多きと知るやとの不復市慰難て姑且俱に惘然する登時姑麻姫の果
 たるは元甲夜過ぬらんと火の四下とるやと復市你が俱くと来ると歩え垣衣と飲ひ女子を
 其麻を考まをえぬといわれて復市心して定おその美ゆは這那と京まとの言をりければ
 まで見参遅滞お及びら先より他共此次の間ゆりしれが等不承はせとといひさる遽に
 身と起しと垣衣女這方へと喚立ら會釋とされ垣衣阿と応て杖入る見参當下姑
 麻姫の燈の下よりと垣衣と執視るふ二八の女子と容止の艶麗る。舉動の鄙も
 現復市がいつふ差を申緒ある武吉の女見おそと近く招たをてあ初て遇ひはる憂
 漏れぬ我身と摘て艱難さ々と想像る和女郎の故郷の伊勢るまを復市小由縁あ人
 づけ初見参する最憑心心地をさる奴婢小医し折るれを使て言さるわのまをさるる
 いてと最艱言の葉と挿頭の花と垣衣の感涙坐額つて世有るは御親命まらる

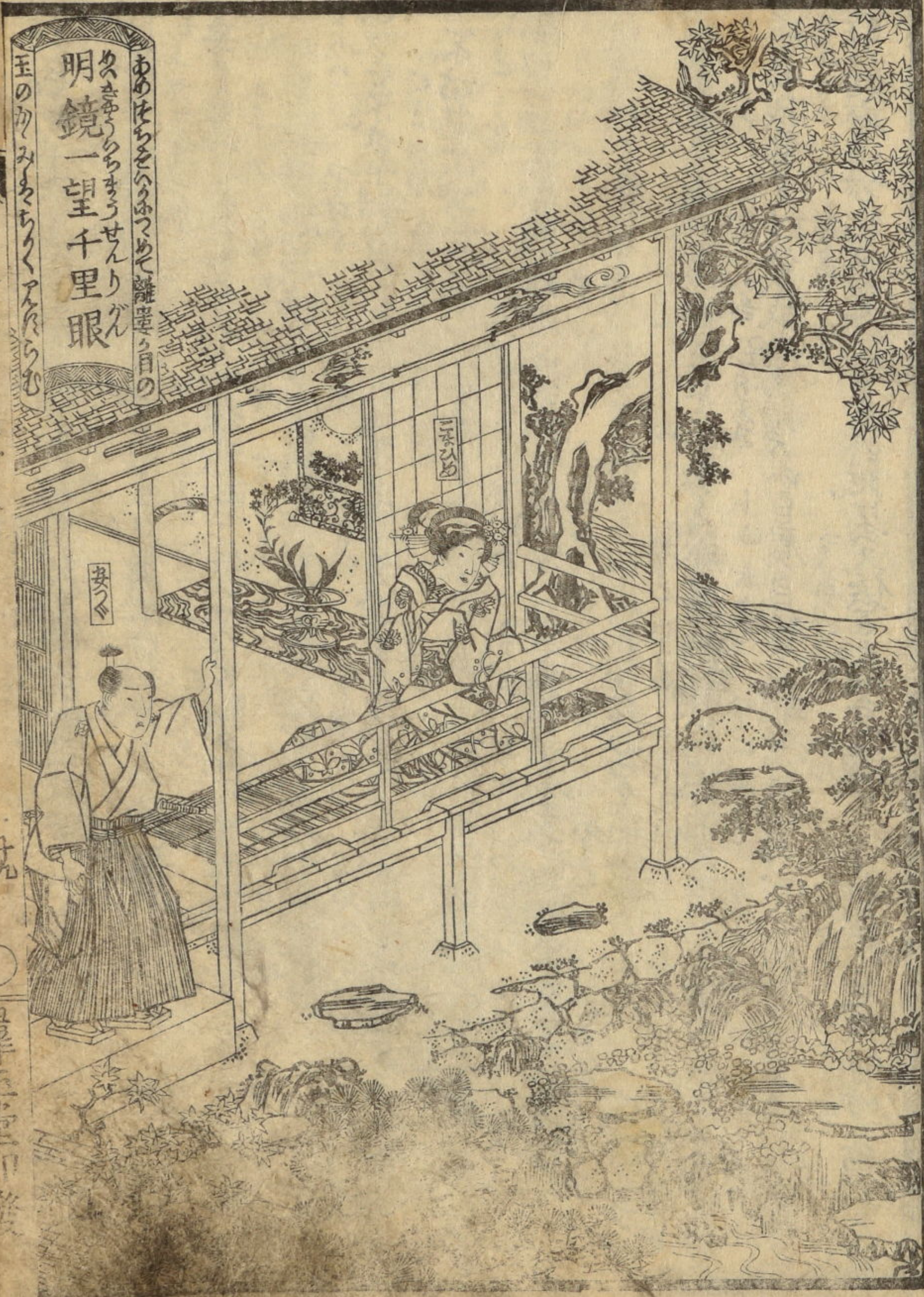
百るえ工るるる星の祟あ身ハ神風の伊勢路も流れえの河内中相識もあまは
 はるを憐ませぬ新水の事でも厭ねと鄙の田舎不生育て心つる死このまをさる
 させぬのかと姑麻姫の夜を不古物々ま主あはるま這里も田舎の僑居い富まやて
 礼節を知らる宿るぬ隔あてあも届か復市の三世の譜第我身の與俗あ
 乳兄弟を侍るる萬吉又と憑むのるれも有敷系男女の差別あ身邊親く使んとの
 你の優をこのべやとの憑く示さる垣衣然且感服と是より側と離るる萬事正
 首小仕か姑麻姫の夜に臥房を俱に考まて聊も介意せし獨心あまら垣衣を才
 長て且心さるの虚華るま他は必復市が結髪を妻あて俱に故郷を走りあん今も復
 市が親の忌服あ他考の謹慎ひ死時あその情縁のとも質回ひる恥ざんや一稔
 等て復市が親の服の関折我身必媒妁と夫婦あるま死のえとを尋思とせ程あ忍
 地小悟るや。早業お我師の別れお位を示さる一三四の句お垣衣粘石窟盈復安との

則今の身も一垣衣の是れは他石倉復市に伴れり来れば石倉結といふ折もわれ
維盈夫婦の禍鬼の身と殺すといふも子復市安次が不思議の伊勢より来る
我身復安をよと西言三句の盡されて盈と虧と維盈夫婦の虧るめく復安は歸
村その子とありとも偶然あるも又前二句の遇一必破とあり一休と一と既分
明只會六有歡と示されるの今も合さるるは我仙嬢の神機計算後必
悟るとあり然れども我の京師を敵一人も敷くは身と縲綑の辱を受け股肱の隅屋夫
婦を喪ひぬ違教の科之縦奇術の破れども又劍侠の技を要せず今より女侠ありまは
と獨り深念の腑を固めは徳而有一日姑麻姫の復市事吟吟語次は仙既の類
家と去て実父の迹を嗣する石倉名乗るの要る隅屋復一即安次と姓名の嚮京師
在り折之管領も知れぬ伊勢へ憚るよあとも他の姓も冒えり隅屋と名乗
る相応かぬの美の心屬する歎とられて復市何となく小雲時心とるせむ

くふと答るや仰定まの理あり小可も亦件の義を思ひゆるり争何れ石倉氏
稟る養育之恩一朝のふあに縦親父母の欲まは義弟の家叔と譲らぬ伊
勢へ還るまはも辞別ゆ及び切て養家氏を冒し徳と忘れぬ志を表さん
去るも宣の表は是も亦耳と塞ぎて鈴を渡むる常言も似るべ仰あも僕も今より本
姓の交復る後小至と幸い小兒子二人も注る一人の必石倉氏を冒りて本来志と全せん
この義と許さぬのみかとの小姑麻姫感嘆と現安次が老実る一椀の糧一夜の宿も報
義士の志況年来艱育せられ報恩然とて感嘆と却莊院を修復は并小奴婢農
僕と新小養をたのむ村長の商量は他も通て我父祖の徳と忘れぬの義封助ある
るよあべと又這一義と談せざる費用は異義小室町の堂中も小倉院より賜りて渡され
千金の然も縫殿貯る財用を小医一から小雲時も猶豫するも復市ありて
次の日村長と故老們の件のよと告知して緯の便宜と徴る小約莫當國の農戸商賈も

皆正成の徳徳と草木にてありてさるるものも今番姑麻多姫が京師にて復讐の爲に
 多く發覺れて宿望と遂にさへも愉快にの言ふと語の接接して憑心く折られ件の
 よと相譚れて更小憚り色も多し鄰郷までもうも取合て商量速の整ひれば男女の見孫多か
 への相応しを迭小擇て各々八九の莊院遣へ或は奴婢と做し農僕中ては姑麻多姫の仕
 るの初より言々りぬるものと御前正直より隸される老伴當三三名東西と令せせり
 主小返遣へけり徳て又村人の山ありのの木を伐出へ食ひ給ひの夫役も出で力も裁して莊院に焼
 たる處を修復せし家も亦初より最奇麗なりこれ姑麻多姫のより錢財言費
 まで落成速きれば口は祖先の恩徳と村長并小村人們の俠氣致致所をその間日毎
 日毎小飯の酒と餽とて町寧小勞ひられ感歎して粉骨と盡さるのさるけり然又楠
 正直の家宅の地所を這那と口官小擇とて姑麻多姫の宿所より六町東のく山山川ある處を
 占て孤山と内中細小川と前中の家を造り招ふ応考番匠們畢中て作支遊滞お及びり

秋の至りてやなす小程徒をてり小憶病鬼小出され苦思公さるるの其頭のり成
 原の正直一個の昔あり名を古子と喚做て今茲二八の月小は姑麻多姫と同庚之遮莫標
 致の町之額廣く頬胎胎と鳩般木茶小似るる花の傍る深山樹ありて日と同居を
 氏と論ふもあつて這秋痘瘡と患けり怕る難痘を毆巫師へ匙を指て召ふも亦
 驗者壇と降りて效るとありの故の正直夫婦は真多回へ寝食とせむく小志死と
 ろの譚ふ這里より程遠く如意宝珠院と女僧道場なる本尊地藏菩薩の人の病
 厄の利益の特小婦女子の難病平愈と禱る志願あり居持の尼并小祈禱成
 憑を護符とていぬるやと尋ねるの正直這説を信容てその日妻の木石と宝珠
 院遣ひの介程の正直の渾家木石は伴當幾名狹徒へ轎子と飛入るる宝珠院へ赴きて
 地藏菩薩と拜する住持智圓尼小對面して女兒の病瘡と生母の祈禱を憑と苦子の
 肌膚衣と生れ歳月の小録と祈禱料の金一包とまわせられ禪尼速小来引てはより初念を



あめはらそこのふつめて離遊の目の
久きあつらちうせんり
明鏡一望千里眼

文政傳第二回

十九

且平五三郎



文政傳第二回

日有像第五

下と先護符と與へけり。是よりして木石の毎々を小室珠院へ専使と遣はし護符とせざり
ける。菩薩の利益行をせむる日と麻糸を苦し難痘稍瘥を既に結痂し及ぶ
辛く命根を係留せられたる痘癩酷く送るべく醜婦よりけり。正直は是等の所以久
八九の莊院に赴きて姑麻姫の輿動を看るとは、情を地を遣はし那首は動靜
現るる不詳也。知る正しきう一一日がう宅地の内を孤山より登り那首は觀且
ま姑麻姫の宿所の光景残りて見えり。是は元九音を欽びて後中千里鏡にて日毎
那首を觀ふ。是て姑麻姫の折々を庭より坐席の半分まで鮮明にええり。那首は
姑麻姫を知りて便り言ふれば、正直も稱れ我みづから那首もくも姑麻姫必小
解さるるん。這眼鏡にて居るが、那首の動靜を觀ふ他、馬脚を露をえり。那首
嗚呼我が妙哉と獨頻り小自負自賛と。那首動靜を觀ふ毎、遊佐の城消息と
昨は姑麻姫の宿所を信する。是の以て又信ると聞き時を報ふ。然る京師の密

謀の筋あるわね。就盛の冷笑してを勞ふる。より正直も亦勢の衰へ漸々悔と自親又
孤山登りて折々家頼の吟吟してを。外はぬ高間の山の雲を。今をえり。信り
程は姑麻姫の叔父正直が稍久く訪も来さる。女兒甘子の痘瘡の重か故り。と知る。と絶て
れども疎に還て得意を後安とせり。折々の風聲と心も。那彼岸の比正直擲
捕れり。遊佐就盛が沙汰とて彼岸と共侶に逃ぐる。奴婢農僕們も往方。法獵り擲捕と遣
る獄舎を敷き。拷問數回及びが。他は悪意ある。わね。那折縫殿の暗號と。た
快火と放ち逃去する。その罪同かり。彼岸に招了と異多し。もろけり。左右も程。彼岸に并
西個の奴隷農僕。老る日毎の呵責。勝る。獄舎の内。身故の。これ。這を。締の。本人
その。背と。二百板。挺と。追放せられ。姑麻姫。これを。憐れ。那折の。勢。思惟。る。彼岸
二。疎忽。る。縫殿。の。自。焼。及。び。が。も。然。る。を。伴。と。報。る。も。比。自。是。言。の。錯。誤。を。誰
の。討。せ。事。る。ね。賤。の。の。智。慧。淺。けれ。漫。ふ。火。を。放。ち。逃。て。れ。の。罪。を。免。る。と。り。て

彼岸二并のそなたの命を預けず不便き明日の縫殿が満百の卒哭忌の丁にこれ他後身
 小も經を讀くと菩提を吊ひ給ふと思ふを信々として復市小僧知して宝珠院好事下を
 町寧小満心を遣い次の日復市と奴婢二百名を物と轎子小僧乗らう那女僧院詣り暮参上讀
 經の間姑麻子姫の本堂の傍る伊豫簾と無る内内在のらと見且ま承慶未掛る漆牌下
 五年五月廿八夜八時出生の女子痘難鮮除の祈禱七月廿九日と八月五日願主楠氏と
 白墨を以て寫しなりあるゆゑ法甚果て客殿坐住持智圓尼と暗譚の折四表八表の
 語次小那美鹿未掛れる漆牌のら向る知智圓尼听々微笑ておれいまぞ知し召ま那の叔
 父公正直王の息女占子小姐のら痘瘡瘡て命危る一折尼の祈禱を憑けて本尊延命地藏
 菩薩の七日祈念しゆりか果と利益をすて日數のぞ瘡のあはれもその生年月と忘るぬ
 與小寫しり信るゆ折尼のら今番限の祈りあはれと小姑麻子姫稍悟りて苦子の奴家と同庚
 果さるる豫少これも誕生月と自時脚牌より初て知れ那女今茲ま痘瘡を果さる

予秋小父の久く是あるゆは是等の障りありを毫も知されれば我従父女弟の病着ありと御寺へ
 詣ては初て少知り反復を恥くてを信るれと陪話と智圓尼慰め然る宣ひ世の鄙語を燈
 臺遠て下暗しと父は是等の故ふたへいれりて當寺の延命地藏尊のら女小御利益
 多る先住智正天禪尼の権り一時大病と十死一生のらと這果御佛の救れ遂本復去の
 けれの佛恩と報せぬ女僧のらと是れ身伯母御并るれ豫少知あるゆ下現世の
 利生灼然これ身後の引接勿論は追薦の亡者達隅屋氏夫妻彼岸二毎孰も成佛せるを
 深信急りぬと鼻着せりて示さる姑麻子姫小僧心と心とる言果て辞別と折尼智圓禪
 尼の邊へ昨日贈れ讀經料の欵と舒きと知客の女僧を先小立て玄關近く送りて又姑
 麻子姫の轎子小僧乗ら宿所かろ程はとと約莫人の本命の生れ年月日時の枝
 榦の神も訟佛も告て冥福と祈るのら小は宝珠院坐る苦子小本命の十幹兄弟を
 用ひて七月の數日の數を寫着れらあるね意す八字生來とるを知らぬと心小狭く宿

順補丸

所^まの還^へりてその甲^よ夜^いの間^ま惜^な字^ま箱^もより十六^{ねん}年^い以前^せの應^あ永^ま四^{ねん}年^下夏^の舊^あ曆^をと^るる^は獨^り
 燈^あ燭^の下^の檢^らし^りかり^の這^こ年^の五^ご月^の二^に十^じ八^は日^は小^こ暑^の六^{ろく}月^の節^の即^す丁^{てい}未^みの月^の又^{また}二^に十^じ八^は日^は是^こ辛^の
 未^みの日^は這^こ時^の八^は鼓^の已^い丑^のの時^の當^あれ^り佳^いれ^ば苦^く子^の八^は字^の生^な来^り丁^{てい}丑^の未^み辛^の未^み巳^の丑^の本^{ほん}命^{めい}
 多^おと疑^いひ^り我^わ身^の同^{どう}庚^の多^た壬^の子^の月^の乙^の巳^の日^は卯^のの時^の生^なれ^り八^は字^の吉^{きち}凶^の大^{だい}く^異多^{なり}
 苦^く子^の八^は字^の考^かふ^は丁^{てい}丑^の未^み比^ひ冲^の是^こ是^こ佳^いれ^ば年^のと^と月^のと^と心^のか^か又^{また}年^の丁^{てい}丑^のと^と日^の辛^の未^の
 と^と天^{てん}尅^の地^の冲^の亦^{また}凶^の但^た年^の丁^{てい}丑^のと^と時^の五^のと^と比^ひ肩^のを^をれ^り凶^のを^をる^は女^の男^の小^の愛^のも^も思^のる^はも^もを^をれ^り容^の止^の
 美^のと^と醜^のふ^るの^のる^る他^の素^のも^も美^の人^のふ^るを^を然^のと^と痘^の瘡^の損^のれ^り賣^の難^のて^てま^ま真^のと^とる^るべ^いと
 痛^のれ^りと^と多^たの^の人^のを^を身^のの^の不^ふ示^のも^も十^じ穂^のの^の芒^の色^の出^でて^て秋^の風^の戦^の庭^の鳴^の鳴^の鳥^の音^の響^のけ^り報^の
 氣^のあり^り怪^のし^し也^也今^の宵^のの^の事^のあ^んと^と夢^のめ^めく^く入^の告^の告^の獨^の睡^のを^を小^の夜^の深^のる^るま^ま此^の由^の断^のせ^り果^の
 竟^の姑^の麻^の姫^の今^の宵^のの^の先^の見^の差^のま^ま又^{また}甚^の麻^のる^る事^のあ^るを^を春^の着^のて^て這^の次^の解^の分^のを^を聽^のね^か
 開^の卷^の驚^の奇^の俠^の客^の傳^の第^の三^の集^の卷^の之^の四^の終^の

第一類のいろ黄をみむくも足まひまほふ
 息をきくくもあまきくも宵をさるるまあるみよ
 のぞき氣をまきくも寝るまの成このむまよ
 肩をまの背をさるるも足だるまよ
 怒身血のめぐりあはれ痛を腹ふのまよ
 積さるる氣をくむ糸やけあらむ
 月水清るる威の五ヶ月又の三年の積水小まよ
 常に大便むけりし目まひをみする
 さんかくひびくもね芳志のまよ
 男女小兒の物と物とのまよ
 此のまよのまよのまよ

小半劑八百十四
 此のまよのまよのまよ

料

凡病を患ふれば先此能書を以て我病は...
三年五年と種々あり...
茶葉...
右...
治...
用...
男...
を...

本家 西國横山町二丁目 大阪屋半藏

京都賣弘所 蛸薬師通東洞院東入町大和屋彦右衛門

此...
...
...
...

使 親 友 臨 臨 近
似 ち 湯 也

